

面白い短歌を作る(詠む)には...

インパクトのある言葉を入れたほうがいい...

固有名詞 (具体的な名前など) 三枝悠 (当時小学校四年生) (『うむ』一九九四年一月号から)



「石頭パキケフアロサウルスゴジンゴジン卵胎生の草食恐竜」

【意味】頭が大きく固い(石頭)のパキケフアロサウルスが「ゴジンゴジン」と頭をぶつける。(メスの親が自分の体の中で卵を孵化させる) 卵胎生で、(肉類を食べず)植物を食べる(草食)の恐竜だ。

パキケフアロサウルスは九音ですが、二句の七音の「ゴジン」が字余りが入っています。長い言葉は二つ以上の句にまたがる「句またがり」で詠んでもよいですね。多くの人が知っているわけではない言葉は、このように強く印象に残ります。

擬音語・擬態語 (オノマトペ) 北原白秋 (第一歌集『桐の花』(一九三三年)から)

「鼻はうまか眼玉を開くはびんすけびんすけびんすけびんすけびんすけ」

【意味】「ウロウロ」(鳴きながら) 今、目を開く「びんすけびんすけびんすけびんすけ」(ウロウロ)。

カタカナの繰り返しなど音を表した言葉が擬音語、動きや様子を表した言葉が擬態語です。あわせてオノマトペも入っています。「びんすけびんすけびんすけびんすけびんすけ」の「びんすけ」は、普通に使われる「びんすけ」ではなく自分だけのオノマトペを使っている。面白いですね。

数詞 (具体的な数) 与謝野晶子 (第五歌集『舞姫』(一九〇六年)から)

「夏の風山よりきたり三百の牧の若馬耳ぶかれけり」

【意味】夏の風が山から吹く「三百の牧場の若馬の耳が(風)吹かれてる」。



「たぐねる」と「うろウロ」は、具体的なイメージがわいてくれます。

外来語・記号など...

インパクトのある言葉には他(外国)の言葉などがあります。「GUMMA」の「ム」は、アルファベットで書き表す「ム」です。

「短歌はついでに書かなくていいわねついでに書かなくていいわね」

反復 (繰り返す)

短歌の中に同じ言葉が何度も出てくる。この反復は、リズムやイメージを強調する効果があります。

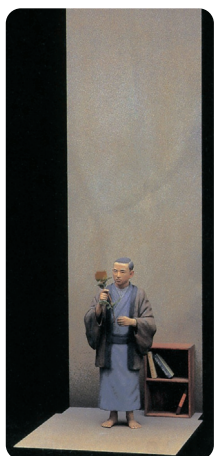
「短歌はついでに書かなくていいわねついでに書かなくていいわね」

分かち書き 石川啄木 (第一歌集『一握の砂』(一九〇〇年)から)

友がみな我よりえりへ見ゆる日よ

花を買い来て
妻としたしむ

【意味】友がみな自分より早く見ゆる日よ、花を買い来て、妻と一緒に愛する。



石川啄木の「一握の砂」はすべて「三分分かち書き」の、形の上でも新しい歌集でした。もっと多くの行に分けて書く「多行分かち書き」をする人もいます。

ひらがな (一字空け) 会津八一 (第一歌集『南京新唱』(一九〇四年)から)

「あめつちにわれひとりあめつちのさびしさをききはほほえむ」

【意味】空と大地の中で、私一人いて立っているように感じるこの寂しさを、君(仏像)は微笑んで(なぐさめて)くれる。



漢字にはかたい印象、ひらがなにはやわらかい印象があります。会津八一は、ひらがなだけの短歌をたくさん作りました。単語の間を一字空けることも特徴です。

句読点 釈道空 (第一歌集『海やまのあひだ』(一九一五年)から)

「葎の花 踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり」

【意味】葎の(赤紫色の)花が踏まれて、新鮮な色が見えている。この山道歩いていった人がいる。



句読点「()」「、」は、明治時代(一八六八-一九一二年)になって、日本語の文章の中で広く使われるようになりました。短歌では使わないのが基本ですが、入れてみると読むリズムが分かり、また見た目のアクセントにもなります。

★啄木、八一、道空は、県立文学館オリジナルの「三十六歌人」に選ばれ、フィギュアのような人形があります。ぜひ実際に見にきてください！
県立文学館ホームページ「三十六歌人ってだれ？」も見てくださいね！